

一同さいしきと木地と參候前後の事

さいしきの臺一番に參候、いかに珍敷候共、木地は後々たるべく候、臺の餘大なるも初は不參候、殿中年の始の一獻始にも、右京兆進上の橋の臺一番に參候、後々はいかやうのも參候、

〔橋庵漫筆^{二編}三〕獻盃 盃を返盃するとき、自臺に乗せず、獻酌の人取次て、臺にのせるが禮なるよし、室町家の御記にありとかや、左も有べき事なり、今酌人の奴婢など、此禮を知らず、勸盃の人も一隅を上げて三隅を取らざる故、禮の體を失せざる様にて、卻て疊の上に直に盃を置いて、勸むることは非禮甚はだしからんか、常人は酌人心得なくば、會釋して吐盞盃臺などにのせて、かへさんにや、

〔茶道筌蹄^五〕盃臺之分

黒 朱 利休形、黒は盃うけの糸輪あり、朱にはなし、

樂燒金溜 啐啄齋好

朱網繪 前に同じ

〔延喜式^{造酒}十〕新嘗會直相日雜器

瓮四口、^中酒坏五合、^備盃^略○

大原野神祭料^{春冬}同

酒四斛、^中酒坏六口、各^備臺^略

〔殿中申次記〕十四日○正

永正^{十三} 一御盃臺二、白鳥一、雁二、鯛十、鯉一、貝蛸一折、柳十荷、

例年進上之、但今日參、細川 右京大夫殿

〔看聞日記〕永享七年三月十一日、自東御方折五合

^有臺、^繪和、^御坏、^臺二、^藤花臺、^盃十居、^繪歌之心、^島南御